

の國と伊勢の國とを結び付くる兩國の國境を掘割るなど面白し。

百姓一人辦當代五錢は幸吉の受持也。凡そ一萬三千工を要し、六百五十圓を支拂うものとす。外に橋、石など金も五百圓位寄附、計千五百圓を支拂うことと可相成候。

三個年間に成功可仕候。五個村の戸數五百八十五戸、學校生徒通學にいかん喜ぶならむと考へ候えば、商賣など面倒也。

明日のご馳走はソバ也。

向キヤハン入用、兵士の如きグル／＼巻くもの、古手でもあれば早速御送附被下度候。

議會解散など國家は分業、人は思ひ／＼。容子と愛子が話相手に來てほしい。

この道路は現に御木木道路と呼ばれ、今も鶴方から陸路多徳にまで自動車も通る路となつてゐる。

言うまでもなく郷土として幸吉に觀念せられた處は志摩だけでなく、伊勢の度會郡及び紀伊の南北牟婁二郡をも含め、即ち宮川以南の縣地が廣くそう考えられていたので、朝熊山の保勝の如きも幸吉が會心の仕事であつた。朝熊山は海拔千八百尺で標高は高いものではないが、當然として平野の間に突立つているため景色が非常によく、展望の範圍は十八州に涉るとさえ言われる。その頂上にある金剛證寺は、古さにおいてわが國有數の寺で、昔から伊勢參宮者の多くが參つた處で

伊勢參らば朝熊をかけよ、朝熊かけねば片參り。

などうたわれた程であるが、維新後は堂宇も參道も荒廢に歸し、參けい者の數も減少していた。幸吉は少年の頃からこの奥の院の虚空藏ぼさつを信仰し、眞珠の養殖事業を始めるに及んで、かかる難事業には、どうしても長壽と健康とを保たねば大成を期し難いと確信し、一方には衛生修養に努めると共に、他方には祈願を虚空藏ぼさつにかけて、壽康を希うたのである。かくて資金を投じて堂宇及び參道の修理をなし、大正六年鳥羽町の火災に鑑みてこの寺院のために火災保險を付け、保險料はかれ自ら喜捨して居り、奥の院には亡妻うめの墓を建て、また自分の墓をも造り、大正六年六十歳になつてからは、毎年盛夏の候には登山して、二三週間を山上に過ごすことにしている。そして山頂形勝の地區に東西兩所の公園を設け、宇治山田方面から登る參道を改修した外に、鳥羽から堅神を経て奥の院に達する道をも開き、その登りつめた處にカゴ立場を置き、ここには眞珠貝百萬個を埋めて國産眞珠記念塔を建てるべき基礎工事をも起してある。この夏季朝熊山上の滞在中に幸吉の腦裏に熟し來つたものは、實に伊勢志摩一帯にわたる國立公園設置の案である。

これより先、大正九年七月に鳥羽町で鐵道開通十周年記念の祝賀會が催された際、これを機會に幸吉は、この地方今後發展の施策として次の十個條を提示して、有志者の協力を請ひ、向ふ十個年を期してこれが實現に努力せんことを宣言したものである。

- 一、二見鳥羽間の道路を改修し、起伏屈曲少き完全な四間道路となすこと。
- 二、朝熊山から堅神に下る道路を改修し、二見街道と合して商船學校前に出で、海岸に沿うて停車場に達する完全な四間道路を開通すること。
- 三、鳥羽驛前に一千トン級の船舶を横着けになし得るさん橋を完備すべきこと。
- 四、鳥羽驛より赤崎に至るまで鳥羽市街を縦貫する四間道路を完全に改修すること。
- 五、波切及び五箇所と鳥羽との間を、屈曲少き三間道路に改修し、併せて鶴方より英虞灣内各地との連絡を十分にすること。
- 六、前諸項道路の完成と相待つて、二見・朝熊・磯部・波切・鶴方・五箇所相互間に約三十臺の自動車を運轉活動させること。
- 七、東洋遊園會社で完成を計畫しつつある桶の山の設備を援助し、便宜を與えること。
- 八、來遊者をして居心地良からせる程度にまで旅館の設備を改善し、かつ増設を期待すること。
- 九、來遊者を満足させるに足るべき物産陳列館その他の陳列場を設置すること。
- 十、以上諸事の達成を容易ならせるため、土地收容その他について協力支援を惜まざるべきこと。

上述各項の實現を期するには、土地所有者を始め總じて利害關係を有する者は、私利我慾を主張

せず、事業の完成土地の發展によりて、自他共に長く利益を受くべき雅量を示して、あくまでも協同努力すべきことを熱望切言した。そしてこれらの中直に實行し得べきものは即時着手することとしたのであつて、以後かれが或は卒先唱道し或は進言施策して實現せしめた幾多の土木事業は、大體においてこの計畫の次第に充實せられたものであつて、幸吉の土木好きは郷土愛發現の一面である。

この計畫に促進の拍車をかけたものは、昭和五六年頃から盛んに全國に起つてきた國立公園の問題である。幸吉が朝熊山に滯留中、宇治山田市及び朝熊山を中心とし、志摩郡から度會郡を経て北牟婁郡に至る臨海一帯の地域を以て、國立公園となさんとするの案を定めて、來訪の地方有力者の賛同を得、かくてその建議陳情が昭和六年一月二十五日、即ち幸吉が第七十四回誕生の日を以て、かれを筆頭に志摩度會・北牟婁三郡内各町村長・宇治山田市長代理・同市會議長・同副議長・同議員一同・三重縣會議長・同副議長・同議員一同の連しよを以て、内務大臣にあて提出せられたのである。この建議陳情は當時採擇せられなかつたけれども、最近に至つて志摩一圓を以て國立公園となすの議が成立確定するに至つた。これ全く幸吉が五十年間の長きに涉つて絶えず提唱し計畫し來つた卓拔な構想と非凡な努力との賜に外ならないのであつて、人は、特に郷縣の人は、かれのこの好意と盡力とに對して感謝の念を捧ぐべきであらう。

もつともこうした建議や陳情で事が済んだとする幸吉でなく、かれはかれとして、その爲すべきことを着々と進めて行つたのである。志摩の中央部に位する磯部から北方伊勢境の逢阪峠のふもとにかけた一帯の地には、伊雜宮を始めオーム石だの天の岩戸だのという往時の名所があり、江戸時代までは伊勢參宮道者達が兩宮の參拜を済ませた後は、二見浦・朝熊山あたりからこの邊にかけて一連の名所回りをしたものである。その後は時勢の推移に應じてこの風も無くなり、そうした名所舊跡も世に知られずになつたが、幸吉は伊雜宮社下の田地を買収してこれを寄進し、全國三大御田植祭の一と稱せられるこの社の御田植祭の復興を助け、またオーム石等への道路を修理して、地方人民のために好個のハイキング・コースを造つた。

さらに擧げらるべき一つの特異な工事がある。それは前島半島における深谷地峽の開削であつてこれによつて英虞灣の奥から外洋に通ずる一運河が新にできたのである。元來眞珠の養殖のみならず、その母貝の生産保護のためにも、海水の温度が重大な關係をもち、ひどい冷潮は眞珠貝をへい死させることは前にも述べた通りであつて、大正十五年度の冷潮が英虞灣一帯の眞珠養殖事業に與えた惨害の如きは、眞に致命的であつた。しかもこの冷潮を防ぐ途とは無いので、關係者の最も苦慮を重ねたところであつたが、天才的な幸吉は、既に發生した冷潮や赤潮は、これを解消させるわけに行かないが、その停滯をば、なるべく少からせる途は人爲で施策せらるべきである。それに

は灣の水を外洋に直通する方法を講ずるにあると考へた。志摩の最南端で太平洋からの障壁となつて深く英虞灣を抱き込んでゐるのが、前島と稱する半島である。それは半島と言はんよりは九分島または九分九厘島と稱してよいもので、その起點たる船越村と片田村との境は、深谷という山合の田畝で、わずか六町に過ぎざる細い地峽をなしている。ヤツト陸続きになつてゐるのが不思議と思はれる程の狭さで、古い記録には、昔は舟を擔いでこの深谷浦の處で、灣内から外洋へ外洋から灣内へと越したもろしく、これが船越という地名の起りだと見えてゐる。とにかくここを切開いて内灣と外洋との海水の直接交流を圖るがよい、それは決して難工事でないとの考が、幸吉の腦裏に閃めいたのである。そこでこの考を船越・片田の兩村に示してその計畫を勧めた。兩村の當局者もこれを悦び、縣當局に陳情上申してよいよ實現せられることになつた。そして昭和六年八月三日起工式を行い、翌々八年一月二十五日幸吉の誕生日を以て補装工事を完了し、三月十一日にしゅん工式を擧げたのである。かくて英虞灣内水温調節の安全弁ができて眞珠及びその母貝の養殖が便益を得たのみならず、運河として船の航行に役立ち、その利便は前島半島を回つた當時に比べると、漁船一隻につき二時間と石油一かんと節約をもたらしたといわれる。これは誠に小いながら地峽を切開いて海峡を造り、半島を變じて島となしたものであつて、自然の地形がそうした切開を待つていたとはいへ、確に大地に不朽の足跡を印したものである。天の橋立切斷の聲を聞く昨今、思い

合せて一入の感をひく。

郷土の改進めざす幸吉が、土木事業への盡力の記録はまだまだ盡きないが、次にその最近のもの若干だけを挙げると、その一は、南島道路の改修と呼ばれるもので、宇治山田市から五箇所街道を経て、紀州の長島に至る指定重要府縣道路約百キロの改修である。

その二は、奥志摩の主要路たる鵜方濱島道路が六年の星霜を経て、昭和十六年の春に完成したことである。これは鳥羽・鵜方方面と漁業の中心地たる濱島とを結ぶ縣道で、産業上重要なものであるから、幸吉は早くからその開通を力説し援助していたが、昭和十年三月に着工され同十六年四月にでき上り、全長三千五百メートル幅員四メートルの新動脈として出現した。その開通式が同月十四日濱島で行われた時、大阪毎日新聞の左の記事の如く、かれは實に三十年の思い出を秘めた話を投げた。

沿線村民待望六年ぶりで開通した志摩郡鵜方濱島間縣道しゅん工式に、生みの親たる御木本幸吉氏は黒紋付羽織ハカマの姿で、古びた二人引の人力車に乗つて、歡喜に沸き返る沿道の人々をアツト言わせながら、試乗バスの先頭を切つて、志摩電鵜方驛から式場の迫子大橋さして乗りつけた。

話は今を去ること三十年前、當時は牛も通わぬ山道であつたのを、時の三重縣探題俵孫一知事

が志摩郡巡視を行うことになつたが、人力車さえ通らぬ山道に知事をどうして迎えるかと、沿道町村長連が頭を悩ましていたのを聞いた氏は、よしわしが一肌ぬいでやると、舊正月休みで遊んでいるお百姓たちを、一人一日當三十錢で招き集め、鵜方と迫子の兩方から工事を進めて、四十日ばかりの間に急造してしまつた。この間氏は麥飯にイワシの素干しの手辨當で、請願巡查二人と共にこれを督勵した。大正二年三月二十二日には無事俵長官志摩郡巡視が果せた。以來この道を入呼んで御木本道といい、今日にいたつたもの。當時の感慨深い氏が多徳島の納屋にほこりにまみれていた、その當日長官乗用の人力車を取り出し、これに乗つてこの晴れの開通式に、おのれのみが知る餘興を演じたのである。

その三は、最近に至つて全通を見た宇治山田市から朝熊山・二見浦を経て鳥羽に達する觀光道路についてである。これは觀光道路と銘打つだけに自動車を自在に通すことのできる全部コンクリートの立派な道路で、三重縣が昭和十一・十二兩年度の繼續事業として經費七十萬餘圓を投じて完成したものであるが、これが完成には、幸吉が最も早くからかつ最も熱心に提唱したものであるからここに附記する。

最初にも一言しておいた如く、志摩から度會の地方は、氣候は良く風光に富んだ處ではあるが、海路の便があつたためか、陸上の交通は開けていなかつたのである。しかるに幸吉が、この地域を

舞臺としてその事業を經營してからは、山を削り海を埋め、原野を拓き堤防を築き、道路・橋梁を改修し、神社・佛閣・學校・病院・役場・交番等を修理した事績は到る處に存在し、かれの登場以來少くとも志願度會の山野は、その姿を変えたといつても決して過言ではない。そう廣大な仕事でもなく、わずか一地方部のことではあるけれども、しかし、一人の力で一地方部の改進にこれほど徹底的に盡力された事例は他にあるであらうか。かれは常に

人にはそれぞれの受持がある、幸吉の受持は宮川以南だ。

と言つてゐるが、とにかく宮川以南の地域に印した幸吉の足跡こそは、いとも大きく深いものがある。

こうした功勞に對して國家から受けた賞杯や褒賞や賞状は、實におびただしい數に上つてゐるしまた昭和十六年四月に國際觀光協會は、外客接待の第一線に活躍した功勞者として、かれに感謝狀を贈つてゐるのも、その一餘慶であらう。

### 一九 廣き敬けん心と強き責任感

幼少の頃から敬けんの念に富み、しかもその信心が至つて廣く、少しも一宗一派に拘泥しないのが、幸吉の一つの大きな特色と見られる。良い兒の頃から宇治山田へくれば必ず參宮するし、眞珠養殖事業を經營する頃になつてからも、重要な決心をした時などは、必ず神宮に參つて申し上げるのである。がこれと同時にまた佛教の歸依者でもある。若い頃から勝峯大徹につき、ついで森田悟由に參禪し、また日置默仙とは生がい不變の親友であつた。しかし、これとても禪宗に限つたわけではなく、知恩院の岩井智海なども親交がある。しからばクリスト教はきらいかというところ、決してそうでない。かつて築地の聖路加病院に入院していた時の如きも、毎日の祈とうの集りに一度も缺席したことが無かつたのである。もつとも二宮翁夜話や鳩翁童話がその愛讀書であるところから見ても、必ずしも宗教に凝り固まるものでもないことが判る。

かれの信仰はそれ故に、教義にこだわるものでなく、却つて天地神明に對する感恩謝徳の心であり、己が良心の謙虚の表象に外ならない。その敬けんの心は言わば、さし上る朝日に合掌した日蓮の心であり、新月を拜した山中幸盛の心であり、平河天神に日參した塙保巳一の心でもあり、手取

り早く言えば、食事の後に一禮する眞しな人の心である。かれは常に「自分には神様がついてござるから、そう惨めな失敗はしない。」と言つてゐるが、けだし正しい道を踏み善い事をするのだから、ヒドク間違ふはずが無いと思つてゐるからである。かれの敬けんは誠心誠意の保證人に神佛をお願するのであつて、言わば良心引受人にお頼み申すのであり、決して神や佛にすがつて勝手なことを望むのでは無い。そして成功すればお陰と感して報恩謝徳の舉に出ようとするのである。こうした廣い敬けん心と純な名譽欲との結合として行われた神社・佛閣への寄進が、かれにはすこぶる多い。

幼時から敬けんの念の篤かつた幸吉は、今も言つた通り青年の頃から宇治や山田を通る時には必ず神宮に参拜し、参拜すれば必ず御門前の石垣の下にひざまずき、さい錢をさし上げ拍手を打つて恭しく拜禮する。さい錢は始頃は文久通寶一枚、寛永通寶一枚であつたが、身分の漸く高上するにつれて一錢銅貨一枚となり二錢銅貨一枚となり、決して違わなかつた。ある日参拜して御門前にひざまずき、懐中の財布から手探りで、二錢銅貨を取出してさし上げるつもりで、五十錢銀貨を上げてしまつた。サアどうしても氣が済まぬので神宮衛士の方へ申し出た。多勢の参拜者の澤山のさい錢のこと故、調べられないといつて断られたが、かれは貧乏で二錢のさい錢を奉納する身分であつて、まだ断じて五十錢をさし上げる身分でないから、どうかお手数でもお調べを願いたいと言ふの

で、衛士も幸吉の眞しな態度に感じてその請を容れ、遂に四十八錢のお釣を頂いたのである。

明治四十年の頃宇治山田に或る會合が催された時、この地方の有力者達が集まつたその席上で、かれは次の如く痛ばしたことがある。

宇治山田の人達は神宮の所在地に住んでいながら、三個月に一度もイナ半年に一度も参つたことがないという者が多い。罰の當る話じやないか。僕はここへ來れば必ずまず神宮に参拜する。常に参拜すると、御木本また來たかと仰つしやるような氣がして、何とも言へぬ有難い感じに打たれる。云々

外宮と内宮の間には、有名なあいの山といつて二個所の急坂があり、参拜者に少からざる不便があつたので、明治四十年、別に國道として平坦な延長一里半のいわゆる御幸街道が新に開通せられ参拜者はこれによつて便利を得た。しかもその沿道は全くの田舎で、物寂しい感があつた。もしそこに何等かの風致雅趣が加はつたなら、一層参拜者の心を慰めるであらうと考へた幸吉は、この國道の兩側に櫻・カエデを、また切取方面にはツツジ・ハギを栽植し、かつ永くこれを維持せんことを縣當局に出願し、その經費一切の寄附を申し出たのである。縣ではせん議の上これを許可し、樹木維持資金に對しては特別會計規定を設けて利殖を圖り、その利子を以て改善・維持・修飾等に充てることとし、以來年々増殖して如上の目的が遺憾なく達せられるようにした。並木の種類につい

ては最初かれは、櫻が日本の名花だから、この名花で兩宮の間を飾ろうという考であつたが、山田町の有志から、せつかくの風致だから、春秋の二季にわたらせて櫻とカエデにしてはとの希望が出たので、これをも容れたのである。

神苑會が創立せられた時にも、かれは自ら進んで金員を寄附し、これに屬する徴古館・農業館が開館せられたので、樹齡實に二百年に上る大ソテツを多徳島から移して、これを寄附したが、明治四十三年に至り徴古・農業の二館が倉田山に移轉し、これに庭園が設置されることになつたので、また自ら進んで園内一切の栽樹を負擔寄附した。大正三年内宮宇治橋外に縣管公園ができた際にも樹木栽植費は全部寄進し、神宮皇學館にもまた獎學金を寄附した。

これより先、明治三十七八年戰役の戦利品が神宮神苑の入口にすえ置かれて參拜者の觀覽に供してあつた。元來天照大神は平和の女神におわしますとの、いとも強き確信を有する幸吉は、これは神慮にもかなわず、善隣の誼にももどることであるから、どうか撤去されるように取計われたいと再三當局に申し出たけれども、ちが明かない。大正十三年十一月三重縣から選出されて貴族院議員となるや、院内に賛成者を募つて建白書を提出しようと考え、同志を求めたところ、賛成する向もあつたが、しない向もあり、何分軍閥ばつこの時代であるから見合す方がよからうと切に勸告する人もあつて、遺憾ながらその事が成らなかつたが、最近に至り、いつのまにかその戦利品が皆撤

去せられてしまつて、かれの先見の明が閃めく。

宇治山田市では、内外兩宮の間を最短距離につなぐ三キロ半の新道路を開設することになり、縣市の支出及び國庫の補助を合せて三十五萬圓の經費で施工するはずであつたが、戦後時局の關係で取止めとなつてしまつた。幸吉はこれを聞いて遺憾となし、昭和二十一年一月二十五日第八十八回の誕辰を迎へ、俗にいわゆる米壽の齡に上つて、しかも猶カクシヤクたる感謝心祝の意味で、この道路開設の費用として五十萬圓を宇治山田市に寄附し、また別に五十萬圓を神宮基本財産として神宮司廳に寄託したのである。さい錢に四十八錢のお釣を頂いた六十年前の事を思い出せば、さすがの幸吉も今昔の感に耐えぬであらう。

在縣中津市に赴くことに必ず參拜したのは結城神社である。かれの常宿たる國分屋から郊外の結城神社までは相當の距離であるが、それに拘らず、かれは毎朝起床すると直ぐことに參拜するのを例とした。大正十三年に貴族院議員となつた時、その記念報謝のため、この神社の神域を回る荒垣を寄進し、昭和十二年祭神結城宗廣の六百年大祭に當り、さらにこれが改修をなし、従前の二十二間を七十八間に延長して、全部花コウ石造りのものとした。

佛教に關する幸吉の信心も元より宗派教義の如何に拘らない。高德の僧侶、達識の師家に親しやして、清談と修養とに役立て、しかも日常茶飯事の如く、おおむねこれを談笑の間になすのであ

る。その參禪の師森田悟由との間にも次の如き興趣ある話がある。鐵道が今日の如く普及していなかつた明治四十一年の三月、和歌山縣下巡しやく中の悟由が、紀州の尾鷲からマグロ船に乗つて尾州の熱田へと急いだ。熱田で汽車に乗換えて、翌々日東京で行われる岩崎彌之助の葬儀に間に合わせようとするのである。その船が鳥羽に着いた時、幸吉は迎いに上陸を請うた。その時悟由は超満載のマグロの血汁が天井から落ちるため船室に留まることができず、甲板上に出て從僧達に圍まれて一隅に坐していたが、從僧達は、師が歸京を急がれるから、とうてい上陸している暇が無という。幸吉は、イヤこの船はかようにマグロを満載しているから、大湊に寄り津に寄り四日市に寄り、寄る處でマグロを揚げて行くから熱田着が後れて、恐らく汽車のまに合わぬであろう。むしろ、ここから上陸せらるれば、明早朝人力車で私が山田までお送りし、直ぐ關西線を利用して東海道線への接続を圖るから、却つて大丈夫であるといへば、靜にこれを聽いていた悟由はヨシ上るうと一言で上陸と決つた。かくて鳥羽に一泊し、しかも人力車と汽車との連絡を巧みに取つて、幸吉は豫定通り悟由の一行を東上せしめた。禪機を含んだとも思われる、トツサの間におけるこの機敏な取計いが、いたく悟由を悦ばせ、かくてその翌四月には、交通極めて不便な多徳島の法會に、悟由は自ら進んで來會した。

多徳島養殖場では、この年は由緒最も深い故小松宮の五周忌に當るので、その追吊法要を催し、

併せて眞珠貝供養會をも行うことになつた。これぞ報恩謝徳を忘れざる場主が會心の壇場である。即ち四月八日釋尊ねはんの日を選んでこれを行い、五年前小松宮御來臨の際案内申し上げた日本水産會幹事田中芳男が、七十一歳の老體を提げて第七回目の來島をなして、心入れの式辭を朗讀し、一同焼香をなし、場主のあいさつがあつて暫時休憩。午後五時より、法會はこれまた七十五歳の老貫主森田悟由によつて始められ、五十餘名の僧徒の讀經があつて莊重を極め、次に三界萬靈施餓鬼の供養が営まれた。そして場主を始め場員・關係者一同の焼香があり、終つて悟由貫主から四恩謝徳の意義についての法話があつて、すこぶる有意義に終りを告げた。

悟由の後にやはり永平寺派の管長となつた日置默仙も、また親友の一人であつたことは、前にも述べた如くであつて、幸吉は默仙を自邸に招いたり、旅行を共にしたりして清遊を楽しんでいた。したがつて默仙は鳥羽にも多徳にもまた五箇所にも來たことが前後七八回。大正七年十月幸吉の母もと死去につき來吊し、客僧として葬儀に参加した時、默仙は邸内屋後の小池に割合大きな石橋が架かつていた、その石橋の上に立ちながら、フト往昔釋尊が石橋の上から教義を説いた故事を思い浮かべて、隨行の弟子僧に向つて説教を始めたのである。傍らにあつてこれを聽いていた幸吉は、亡き母の葬儀に禪師のこの石橋上の説教を聽くのも因縁の淺からぬものがあると感じ、この石橋を以て自分の墓碑とすることに思い定めた。その後居宅を山の上に移し小池を埋めた際、この石橋を



ば提提寺たる濟生寺の門前に移し、現に今もそこに保管されている。

黙仙は東京に出ると必ず幸吉の寓を訪れ、幸吉もまた日せん寺に可睡齋にまた永平寺に、しばしば黙仙を見舞っている。永平寺の門前に大きなウドン屋がある。かれは永平寺に参する毎に、必ずまずこのウドン屋に立寄つてウドンを百圓だけ注文し、これを一山の衆僧に頒つことにし、そしてそのつど、かれは衆僧に對して一場のあいさつを述べることにしていた。ウドンこそは幸吉の身に最も縁故の深い物であるところから、そのあいさつが思わす知らず長くなり、セツカクのウドンが湯の中に溶けて箸に掛らぬようになる。僧達もこれには弱つて或る時、まづウドンを頂戴して、しかる後御あいさつを伺うことに、順序を變えて頂きたいとの注文が出て、主客共に大笑となつたという、ほおえましい話もある。

大正八年一月に黙仙は鳥羽に來て壽福如意と染筆したが、その翌九年八月に信州上林温泉で入寂した。その遺がいが永平寺に送られて密葬に付せられた席上、幸吉は遺がいに向つて

禪師よ、私は昨夜は師のねまきをまもつて師の寢臺に寝た。そして必ず夢に師が現れ給うに相違無いと待つていたのに、師はついに現れず。師よ、あんたはうそつきだ。

と叫んだ。それを聽いていた加賀天徳寺の住職で本山永平寺の後見役を以て自ら任ずる老僧は、何か感動するところがあつたと見え、忽ち列坐の衆僧に向い、聲張上げて次の如く呼ばわつた。

コリヤ坊主ら、大俗人の御木本の今の話を聽いたか。わしは先師突堂和尚の一軸を珍藏しているが、坊主らの中に、これを興えるに足る者が無い。大俗人の御木本にこれをやる。

元來永平寺の坊主は、坐つたままで寝るはずのもの、また寝られるものじや。しかるに御木本は黙仙和尚のために、イスを持込んだり寢臺をすえ付けたりしたので、わしは氣に食わぬことをする大俗人だと憤慨していた。しかるに今日只今の話を聽いて、わしは感心した。よつて突堂の軸はこれをこの人にやるぞ。

暫らく過ぎて黙仙火葬の通知が永平寺から鳥羽の幸吉の許に届いた時、歴代管長火葬場へ通路の橋がいたんでいるから、新しく架替えたいとの希望が書添えてあつたので、かれは直に吊詞と共に金二百圓を送つて橋架替の資に供した。ところが、やがてまた書狀が來て、橋は數十年に一度使うだけだから應急修理を加えておき、他の重要な道路の修復費に右の金を使用させて頂くから、御承知を請うとの申越しであつた。よつてかれは、別途使用の儀は承知したが、橋は橋でヤハリ架替えるがよい。金は更めて二百圓送つたとの返事を出して、その趣旨を貫徹させた。ところが直ぐまた名は何としましょうかとの問合せが來たから、即座に極樂橋と返電した。

この外西有穆山・秋野孝道・足立宗法・新井石禪等の名僧は皆多徳島を訪ねている。壯年の頃から九十歳を越した今日に至るまで、眞に長い間にわたつて、眞珠を伴とし眞珠と闘い

眞珠を産んで眞珠をほふり、眞珠のために笑い眞珠のために泣き、朝から晩まで眞珠と同居して夜も眞珠を夢み、果ては御木木の眞珠か眞珠の御木木か、御木本無くして眞珠無く、眞珠無くして御木本が無いとまでうたわれた幸吉が、今日までに殺した眞珠貝の数は無慮一億五千萬個に達すると言われる。一切の生物に佛性を許す提心に富んだかれは、眞珠貝のために再び一大供養會を催すこととなつた。時は昭和十一年十一月十五日午後一時から鳥羽眞珠が島で行われ、この度は淨土宗の總本山たる知恩院の門跡岩井智海大僧正が来る手配にしてあつたが、横濱親教の際引いた風邪が高じて引こもつたため、大本山黒谷法主郁芳隨園大僧正が來島して導師を勤めた。これより先、會場には白木造の祭壇を設け、一億五千萬個の代表として一百五十萬個の眞珠貝を山と積み、島と鳥羽町との間には小舟を運ねて、その上に養殖場でタンポに使つてゐるたるを並べ、それを支えとして浮橋を架けた。その浮橋の長さ九十五間、四日間でき上つた。そしてかれの一家が先頭に立つて渡初めをなし、ついで参けい者一萬數千名の多數が人波打つてこの橋を渡つて會場に押寄せ、眞珠が島は暫時にして人・人・人で埋まり、秋晴れの青空に供養繪卷の繰揚げを待つた。やがて導師郁芳大僧正は僧徒二十七名を卒いて登壇し、讀經・燒香・法話等法事は豫定の順序を追つていと厳かに取運ばれ、幸吉のあいさつがあつて、午後三時に前代未聞の眞珠貝供養の幕は一應閉じられた。そして供養を受けた一百五十萬個の代表眞珠貝は、祭壇から三十五馬力の發動機船五隻に移乗

させられて鳥羽港外の太平洋にまで運ばれ、海底深く水葬に附せられたのである。この日各地御木本眞珠養殖場代表職員の外、代表海女百十名も參會し、式後會場の東海岸で作業行事を行い、また鳥羽町内八十歳以上の高齢者を會場に招待し、記念品として毛布一枚ずつを贈呈した。この供養會の實況はニュース映畫として東京及び名古屋等で展示せられた。かれはまた、この供養の記念として知恩院の寶物たらしむべく、バラオ島その他で多年にわたつて苦心養殖の結果採取した黒眞珠で造つた珠數を寄贈したところ、知恩院では、例の有名なウグイス張りと忘れガサと合せて當山の三名物として、永久に重寶するといつて喜んでゐる。そして翌年三月十日行われた三上人遠忌大法會に、岩井老管長がこの黒眞珠の珠數を手にして溫容を見せたので、それが知れ渡つて京都邊に名高い話の種となつた。これを聞いた他の大法院から價格十萬圓の黒眞珠の珠數の注文を受けた。幸吉はしかし、黒眞珠は集められないわけでもないが、珠數は眞心のこもつた感謝の象徴であつて、取引の商品でないといつて、この注文を辭退した。

クリスト教についても、幸吉は敬けんの念を持つて居るのであつて、クリスト教徒の親友も少ない。日本女子大學の設立者たる成瀬仁藏の如き、わが國感化事業の創始者たる留岡幸助の如き、國民貯金運動の盡力者たる金森通倫の如き、何れも然りで、幸吉が中年頃から酒も飲まず煙草も吸わず、立派にクリスチャンの資格を具えているのも、こうした交友から受けた感化である。神戸

ではクリスチャンの泊る海岸通の畠中良助という禁酒禁煙の宿屋が、かれの定宿であつた。

大正十五年十月十六日渡米の途に上るべく東京驛を出發したあの時である。ブラットホーム一杯の見送の人々かば「万歳・万歳」の聲を浴せられた汽車の窓から、幸吉は顔を出して「有難う・有難う」と言う代りに、「責任・責任」とばかり叫んだものである。どうしてかと同行の宮島博士が尋ねたら「かくも多数名士の見送を受けては、何か社會に役立つみやげを持つて歸らねば相濟まぬと責任を痛感したら、思わすそれが聲に出たのだ。」と答えた。このように、かれは責任の觀念の非常に強い人であつて、商賣上についても、責任を重んじなければ信用はできないとか、無責任であつては、どうしても長続きせぬとかは、その常に口にするところであり、ことに在外支店に赴任する職員等に示す一つの警告は、「一時の利得に目がくらんで無責任なことをすると、國民の恥さらしなるぞというにある。職員等にかく教えるほどであるから、自分自身にあつては、何か勤勞奉仕をする時の格勤勵精なこと、用意周到なことは、全く至れり盡せり、眞に間然するところが無い。ことに内外博覽會等への出品とか、公共團體その他一般公衆への展示とか、高貴な方々への供覽とかいう場合には、この熾烈な責任感がムクムクと全身に盛り上がつてきて、かれを猛然奮起させずにはおかない。こうした場合のかれの姿を見ると、献身没頭とでもいおうか、眞に全我を傾けて働か抜くのである。内外博覽會への出品や公共團體への展示等については上文しばしば述べたから、

ここには高貴な方々への供覽に關して、かれが盡した奉仕の若干を擧げよう。

明治四十四年五月に昭憲皇后が伊勢に行啓になり、同月二十一日伊勢神宮に御參拜の後、二見浦にお出でになつたが、その時養殖眞珠採取の實況を御覽に入れるべき旨の命を、幸吉はその筋から受けたのである。この日陛下には特にしつらえたお濱床に成らせられた。ここにお待ち申し上げていた御木本眞珠養殖場の海女五十名は、平素ならば半裸體であるが、それでは畏れ多いと、いづれも揃いの白シャツ・白モモヒキをまとい、五隻の小船に分乗し、立石附近に進んで停船していた。やがて幸吉の指揮の下に、空氣抜きの目鏡のまま一時にザンプと海中に身を躍らせ、水煙サツト立揚るまに、それぞれ海底に沈んで眞珠貝を捕獲しては浮上がり、浮上がるかと思ふまにまた沈んで行く、その巧妙な技は遙かな岸から見ていると、まるでカモメの如くである。かかる實況を初めて御覽になつた陛下には一入御興を催されたように拜した。この作業が十數分で終ると、幸吉は直に今捕獲した貝を持つて御前に伺候し、それを開き眞珠を取出して御覽に供したところ、十個の中から美しい眞珠三個を摘出し得た。陛下には御手を下し給うて、つらつら御覽あらせられ、右三個の眞珠は御か納を辱うし、殘餘五十個の生眞珠貝も直に荷造りの上東京へ送付せよとの御事であつた。よつて幸吉は自らこれを携えて、その夜の列車で上京して献納した。

皇后陛下には、さらに小學校兒童の綱引その他の遊戯を御覽の上、賓日館内の御休憩所に入らせ

られた。その御休憩中突然幸吉に拜謁を許される旨仰せ出されたので、有田三重縣知事はかれを呼んだが、混雑中の折柄その姿が見えず、ヤツト二見館にいるのを呼出され、知事に伴われて参入拜謁し、香川皇后宮大夫を経て種々説明申し上げたのを御聴取の上、同大夫を以て

この有益な發明をなしたのは國家のため満足に思召される。

との令旨を拜し、御紋章入三組の銀杯を頂き、非常な面目を施して退下した。

幸吉が御前に伺候した時には例の通り縮服であつたが、拜謁の際御側近く侍立していた女官の中に、微かに失笑したものがあつた。かれは野人禮にならぬためかと恐縮したが、御座所を引下がる時始めて氣が附いてみれば、粗服の左胸部に緑じゆ章を掛けたのはよいが、右方の羽織のひもに大きな門鑑を吊したままであつたことを知つて恐縮した。女官の眼に映つたのは、緑じゆ章と門鑑との奇異な對照であつたのである。なお漏れ承るところによれば、皇后陛下には、幸吉が眞珠摘出の際、その一個を取出す毎に必ず白手袋を取替えた用意の周到なのに御心をとどめられ、お歸りの車中で特にこの事をお物語あらせられたとのことである。

大正十年五月當時皇后にましました今の皇太后陛下宇治山田に行啓あり、神宮司廳に御駐れんあらせられた。幸吉は伺候して生眞珠貝一かごを献上し、御前において眞珠を摘出して御覽に供したのであつて、その手續は、明治四十四年二見浦で照憲皇后の御覽に入れた時と全く同じであつた。

陛下にはいと御興深く御覽遊ばされ、大森皇后宮大夫を以て色々有難き御仰せを拜した。長崎縣知事を勤め大村灣の眞珠貝について知つていた大森大夫は、眞珠貝に關して説明申し上げ、その肉も食用になりますと言上して、御木本の開いた眞珠貝の肉の一片を、そのまま食して御覽に入れたのであつた。大正十二年十一月皇后陛下宇治山田に行啓あらせられた際にも、皇后宮主事三條公輝を特に多徳島にさし遣わせられ、幸吉の事業の情況及び海女の作業等を視察せしめられた。

大正十三年一月幸吉は宮内省御用達を命ぜられた。これより先、宮内省調度寮よりの御用命は既に明治三十九年から毎年のことであり、また皇后宮職よりは、大正四年から、東宮職よりは同十年から年々御下命を受けていたが、いよいよ宮内省御用達の恩命を拜するに及んで、かれは感激措く能わず、滿腔の至誠を以て責任を全うせんことを期した。というのは従來、皇室に御婚儀等のある場合には、御洋装の調度は擧げて外國品を御買上になり、これがために宮内省から調度頭が彼地に出張したものである。國産品の優良なものが乏しく、細工の技術においても、外國をしのぐに足る程のものもまだ現れなかつた當時には止むを得ない次第であつた。しかるに大正十二年十一月下旬に行わせられる東宮殿下の御婚儀に際し、東宮妃とならせらるべき良子女王殿下の御洋装裝身具は、一切御木本眞珠店が御用命を受け、わが國の工場において國産品を用いて謹製すべき恩命が下つたのである。その上良子女王御用の冠を始め首飾・留針等重要な御調度品は、皇后親ら御選定になる

とさへ承つた幸吉の感激は例えるに物なく、誓つて立派なものを上納して御思召に副わんことを期したのである。

當時御木本貴金屬工場は麴町内幸町と三田豊岡町とにあり、模範工場として内務省からも表彰せられていたものであるが、この度の受命により幸吉は、さらにこれを整頓し、非常な張切りを以て工場長以下を督勵し、精進ことに當らせたものである。かくてこの年九月中には全部完成納入の豫定であつたが、そこに思いがけなく突發したものは九月一日關東地方の大震火災であつた。當時これは内幸町工場の隣りに假寓して、工場内の監督に當つていたが、背後の工員合宿所が大音響と共に崩れて工場長が重傷を負うたので、スワ一大事と工員・店員を督勵してまず御用品を全部取りまゝとめて箱に納め、その足で餘震のしきりに續くさ中を豊岡町工場に飛んで行き、ここでも謹製中の御用品を取りまゝとめ、何れも数名の店員に死守を命じた。しかも震災について火災が起り、刻々危険にひんするを見るや、幸吉は敢然として自ら御用品全部を捧持し、人波を分け猛火を潜つて宮内省に出頭し、ここに始めて息をついたものである。

以後昭和三年九月には秩父宮様の御婚儀が行われ、同五年二月には高松宮様の御婚儀が行われ、同十六年十月には三笠宮様の御婚儀が行われたのであるが、その都度幸吉は御調度品謹製の御命を拜した。かくて今上陛下を始め先帝御直宮様の御成婚には、いつも御用命を受け、しかも國産品を

以て謹製を了して御か納の榮に浴し、實業人としての責任を完うしたのである。

これより先、昭和十二年六月皇太后陛下には關西地方に行啓の御事あり、同月七日午後鳥羽町なる御木本邸に御台臨の儀を拜したのである。この日志摩路は朝來さみだれ降りしきる中を、午後零時十分お召列車は鳥羽驛着、山の深緑、海の紺青、初夏の雨に一きわ映えた港の町をながめられつつ、御車を程遠からぬ眞珠門に進められた。幸吉は本日破格の榮光に感激の胸を躍らせながら、老顔一入若やかに謹みて御先導申し上げ、大谷皇太后宮大夫以下供奉員一同・安藤三重縣知事等従いまいらせる。眞珠門より玉歩をさん橋に移させられたが、このさん橋は小舟を浮べ連ねた上にタムを並べ、その上に浮橋を架けたもので、先年眞珠貝供養會の時初めてこの方法によつてさん橋を架け、一萬數千の人達を渡して、その安全性を確めてあるから、この度は一層堅固にしつらえて御用に供したのである。

眞珠が島に進ませられた陛下は、橋のたもとに奉拜している高齢者一同に會釋を賜い、吹募る風雨の中に端然と御かさをかざし、眞珠参考館に着せられて御饗食を召させられた。午後一時半東海岸に向わせられたが、折しも十隻の船に分乗していた百五十名の海女は、一齊に飛まつを揚げて採取の作業を演じ、或は潜り或は浮ぶ。この頃より風勢一入劇しく、海から吹上げる雨は御衣を潤し、御眼鏡まで曇るのを少しも御厭いあらせられず、いとど御興深げに御覽あらせられた。それよ

り丘上の御展望所に登らせられ、煙雨に浮ぶ島々をながめられ、次に眞珠作業所にては母貝整理加工の工程を、また屋外の天幕内にては生貝から眞珠を摘出する實況を、それぞれ詳しく御覽あらせられた。その間幸吉に對し種々の御下問があり、従業員の中には作業のため視力を害する者は無いか等のお尋ねもあり、かれは少しもその虞無き旨を申し上げた。

かくて二時間を雨の眞珠が島に過された陛下には、再び浮さん橋を御徒歩で渡らせられ、御車に召されて更に邸内工場にいらせられて、選玉・穿孔等を営む女工の作業を御覽あり、御木本邸で暫時御休憩の後、午後四時四十五分の列車で宇治山田に向わせられた。

かかる破格の榮光に深く感激している時、昭和十六年十一月圖らずも、また皇太后宮職から御召があつて、靈杖一枚御下賜の御沙汰があり、翌十七年一月にそれが傳達せられたのである。實業人でありながら、常に名譽をこいねがつている幸吉は、世にもたぐい希れなこの恩賜を拜して歡天喜地の有難涙にむせび、この上は一日も多くこの世に生き長らえて、ひたすら國産眞珠の増殖に盡力せんことを誓つた。そして至つて廣い敬けん心と極めて強い責任感とで築き上げた、かれ獨特の人生觀の上に安住して、朝から晩まで「有難いぞ、有難いことじや。」と口癖のように言い暮らしている。

## 二〇 稀有の壽康と非凡の攝生

親疎の別無く人は皆、幸吉の健康と元氣とそして長壽とに驚異とせん望のひとみを向ける。世間で往々使う「老いてますます壯」とか「カクシヤク壯者をしのぐ」とかいう形容の言葉が、かれにおいて至適最良の實例を見出すからである。もち論世には九十歳はおろか百歳を超える長命の人も無いではない。しかし老もうしてしまつているとか、ほとんど寢てばかり暮しているとかでは、あまり珍らしくもوراやましくも無いのであるが、元氣ハツラツ、耳目そう明、談論は風發、機略は縦横、一見して健康そのものであり、再會してうたた萬年青年よと感ぜしめられること幸吉の如きに至つてこそ、長壽は長壽の意義を有すると言つてよい。本年一月二十五日を以て滿九十歳の誕辰を迎えて現に九十一の呼び聲を持ちながら、その頭腦の明確なことは側近者も齊しく驚くところであり、總じて事業の計畫や取引の豫測等において、他のことはとにかく數量の點になると、三十四十の働き盛りのかれらは、その胸算用の誤謬が、しばしばかれの訂正を受けるのであり、店員や場員の總てが、數と量との精確さにかけては、とうてい老主人には叶わないと甲を脱いでいる現前の事實からしても、かれの健康は實に心身の全部にわたつた稀有のものであり、かれがなほこの上の

長壽をこいねがつているのも、決して無理ではないとうなすかれる。

言うまでもなく幸吉は生來健康な體くの持主であるに相違無い。祖父吉藏は八十六歳の長壽を保ち、生母もとも八十二歳まで生き永らえたのである。しかし若い頃から非常な苦勞を積み、通常人ではとうてい耐え切れない奮闘努力を續けてきて、しかも九十歳を越した今日なお健康そのものであり、萬年青年の名をほしいままにしているのには、かれ自らにおいて深い修養を積んだ結果に外ならないものが確にある。早くから種々の事業に手を延ばし、政治の面にも一時活躍したかれは、青春の頃から活動家には相違無かつたが、しかし交際上酒も飲めば、また喫煙の如きは人並外れてたしなんだもので、かつて一友人と共に旅行した時、東京から京都まで煙草の火の消えないように吸い着け吸い着け飲み續ける競争をして、しかも勝つたことさえある。それが今日の如く禁酒禁煙さながら宗教家の如き生活をなすに至つたのには、その因縁がある。

精根を凝らして眞珠の養殖に苦心していた頃のことである。眞珠は四年五年もかからなければ物に成らぬことを知つた幸吉は、長生しなければ、とうてい功を收め得るものでないと感得した。その頃同じ志摩郡の甲賀村に松村松壽という有識の老人がいた。老境に入つても少しも老衰せず、常に糧木を事とし、糧いだその木に花が咲き實のなるのを見て樂みとしていた。俗に桃クリ三年カキ八年という如く、ユウユウとして自然の生長を樂むこの人の日常を觀て、幸吉は深く悟るところが

あり、自分もまたこうした氣持で眞珠養殖の事業を完遂したいものだと考えた。そこで斷然酒をやめ、煙草をやめ、衛生に留意して健康の増進に努め、かくして専ら長壽を得んことに心掛けたのである。やがて金原明善が植林によつて國産を興すことに勤めて成功したことを聞き、これもまた長きに涉つて勤勞を積んだ結果に外ならざるを思い、いよいよ長期に渉る大きな成功を希うに至つた。

明治四十二年九月に伊勢新聞が名流片影と題して、多くの名士に對し、一、貴下が最初の志望と現在、二、貴下の娛樂、三、貴下の足跡、の三問を掲げて回答を請うたが、その時かれは次の如く答えている。

一、志州鳥羽の邊境貧賤の一ウドン屋を繼承せし予は、最初より冒險的企業の性向を有し、海は水産に陸は鐵道に種々關係したることあり。後遂に眞珠の養殖事業を起し、近時漸くその緒につくに至りたるが、その對外的なると國家的なるとを思い、一生の事業として將來の大々の發展を企圖して止まず。

二、予は從來特記すべき娛樂を有せず、ただ事業にあくさくするを以て無上の樂となす。しかれども神を拜し、佛僧の講話に心身の修養をなすの餘裕を存せざるにあらず。また性來曲馬・玉乘・曲藝の類を好む。間食は餘り取らざるもソバ・イワシのスポシは余の最も珍味とするところ

ろなり。寒暑を分たず冷水浴を行い、總身の力を込めて柱押しをなし、シコを踏むを以て毎朝の行事となす。また諸種の人々に會し放談をなすは予の大いに快とするところなり。

三、壯年時代における予は、ほとんど一個年の三分の二を事業上の旅行に費したる程にて、したがつて北は北海道より南は琉球に至るまで、全國沿海の地にして踏破せざる處ほとんど無し。

近時は郷里・大阪・東京の間を毎月兩三回相往復するのみ。

この往復の途次には津に立寄り、津の常宿が國分屋であつたことは、前に述べたところであるがこの國分屋にお花という女中がいて、小柄ではあるが氣轉の利く者であつたから、かれは小人島のお花と呼んで召使つていた。この女中が旅館におけるかれの生活について、伊勢新聞の記者に次の如く語つてゐる。

あのお方は朝は非常に早起きで、五時にはキツトお眼覚めですが、覺めるが早いのか、配達人が雨戸のすきまにさし込んで行つた伊勢新聞を抜取つて、六ページ共讀んでしまわれる。それからお裸かで廣庭に出られ井戸水を汲んで冷水浴です。寒中でも頭から水を浴びられます。それが済むと浴衣を引掛けたまま表へ出られたかと思うと結城神社へ参られ、お歸りになると朝の御飯です。元來が忙がしいお方で、ソレ手紙ソレ電報と引切りなしですが、それも私共が遅いと御自身で郵便局へ行かれますし、電話は必ず御自分で掛けられ、決して女中に取繼ぎさせられません。

新聞は東京のも大阪のも、津に來る新聞は残らず買取つて一應眼を通されます。ほんとうに精力主義のお方でございまして、マア年を取るほど若くなられるようです。云々

かれの日常生活が手に取るように見える。明治四十三年一月の實業の世界所載「日本の眞珠王御木本幸吉君の事業はかくの如き失敗を突破して成れり」と題する記事の一節にも

御木本君は本年五十三歳である。毎朝必ず水を浴び、柱を相手に四肢を踏み鳴らして相撲をとるのが君の體育法である。常に木綿着物を着て、ゲタは十五錢以上の物ははいたことがない。白足袋だけはいつも新しいものを懐に入れていて、人を訪ねる時にその家の玄関先に行つてから、はくことにしている。汽車はもち論三等車で、昨今漸く一等に乗るようになった。君が一定の順序を踏んで物事を着々としてやつて行くという性質は、日常の行動にも現れている。

とある。質素な衛生的な生活によつて、健康に注意すると同時に、敬けんなかれは、長壽をばその信仰する神佛に祈るのである。朝熊山金剛證寺の本尊虚空藏ぼさつに八十五歳までの壽命を願ひ、八十五歳に達してからは、前島にある御座の不動尊に尙數年の延命を請うたのである。また皇太后陛下から靈杖を頂いてからは、更に報恩の途は、一日でも多く長命して眞珠の増殖に盡すにありと悟つて、かの後陽成上皇から靈杖を賜つてから後なお二十八年も世に長らえ、百八歳の高齡を以て遷化した天海大僧正を手本に取つて、なおこの上の存命をこいねがつてゐる。



思えば體驗と學理とを結合することによつて眞珠貝の壽命をさへ延長させたかれである。自己の保健延命について合理的の攻究を怠らなかつたのは、元より言うまでもない。むしろ非凡の攝生家と稱しても過言ではない。では何か變つた攝生方法でも實行しているかを見ると、必ずしもそういうことはなく、直前にも一言した通り、酒は飲まず煙草は吸わず、早寝早起であつて、朝寝夜更かは絶對にしない。飲食物については極めててん淡で、どんな珍味佳餚でも過食は決してしない。その思い切りのよいのは、傍で見ても、むしろ氣の毒なほどである。要するに衣食住の總ての面に涉つて、極めて合理的であつて、いわゆる口腹の欲にたんできずするということは全然無いのである。これらは何れも平凡なこと許りであるけれども、六十年間これを勵行して變らなかつたところに非凡の攝生たる價值がある。かくの如く日常の生活において絶えず攝生に留意すると同時に、一年に數回は必ず良醫について健康診断を受ける。即ち東京に出てくることに、いくら忙がしなくても三四個月目には掛かりつけの醫師たる入澤達吉博士に診断を請うことに定めてあつた。入澤博士が逝かれてからは、名古屋醫大の教授で故西園寺公望の主治醫たりし勝沼精藏博士にお願してゐる。これについては後にも述べるであらう。

もつとも幸吉は、ただ壽康のために壽康を求めたのでなく、特殊な事業の完遂のために、己が欲する社會奉仕をしてみたいために、保健を希い延命を望むのである。かくてかれは、古來の偉人や

優れた先輩の中から模範と思う人を選び、これを手本として、それにアヤカロウと努める。田畝の間に身を起して遂に一世の宗師と仰がれた模範人物として二宮尊徳を崇敬し、近くは躬行實踐勤勉努力の典型として金原明善に私しくし、また海外貿易の先覺として森村市左衛門を敬仰し、さらに實業界の巨匠として澁澤榮一に傾倒したこと等については、上文隨處に述べた通りであるが、これら模範先輩の攝生法・處生術をつぶさに研究して、これに模倣し追従せんことに少からざる努勉を加えた精神的奮勵の力を見逃がしてはならない。

精神的といへば、さらに幸吉が青年の頃から精神修養の方途として、極めて忙がしい生活の間にも寸暇をぬすんで心掛けた參禪と讀書もまた、稀有の壽康に無關係であつたとは言ひ切れない。參禪については、壯年の頃提しを受けた勝峰大徹を始め、およそ禪門の碩學大徳といわれる師家にはつとめてその感化を受け、その教導に親しんだものであるが、しかし決して禪宗に限つたわけではなく、また必ずしも佛門に偏したのでもない。前にも一言した通り、他の宗派に屬する人でも、思想家或は有徳者といわれるほどの人々とは、交際を結んで修養に役立てることを忘れなかつたのである。讀書に關してもまた幼少の頃寺子屋に通つた外は、家庭の事情で長く成規の教育を受けることのできなかつたかれは、生業に従事しながらも讀書によつて修養を積むことを怠らなかつた。もつとも幸吉の讀書は、時を定めて机に向つたものではなく、世界を大學校と觀じたかれは、むしろ思

念の轉換のため、頭腦の慰藉のために、或は舟車の中において或は睡られない夜中において、なされたものであり、その書物も、哲學のそれでも科學のそれでもなく、また職業實務のそれでもなく、手當り次第のものでよく、しかも幸吉の好んで愛讀したものは、偉人の傳記または篤行者の言行録であつた。そしてこうした場合大抵の人は、その讀物の内容に興味を感じて暫時現實の苦惱または疲勞を忘れると、それで満足するのであるが、かれにあつては、こうした興味喚起でその影響が終りを告げるのでなく、自分がこれを模倣しようとする念慮を起す、イナ進んでこれを乗越そうとする氣が、心の底から盛上がってくる。こうした負けじ塊といわんよりは、むしろ勝ち氣、たとい模範に對してでも、それより一步先に出ようとする、善い意味においての勝ち氣こそ、かれをして前進また向上、どこまでも進んで止まることを知らざらしめる動力であつて、それは直前に擧げた宗教的の修養と共に、かれの場合にあつては、その壽康にまでも影響を及ぼしていると考へられる。

昭和の初頃東京日々新聞から尋ねられた「私の健康法」として、かれが答えたのは實に左の如くである。

一、常に海風山色を愛し、四十年間を通じて毎朝五時に起床、水浴を缺かさず。食前大神宮様及び虚空藏様を拜し、十五分間シリヲハシヨリ、二本杖にて運動をなす。夜は八時に就寝。その

前十分間、床の中にて上腹部より下腹部に向つて、さすり下ろすこと數十回。

二、六十歳までは、主食はムギ飯三碗、サツマイモ一碗。六十一歳よりはムギ飯一碗を減じた。

副食は、朝はミソシル一碗、鶏卵一個、晝は野菜物、夜は魚または鳥を用い、漬物を好まず、梅干一個を食す。

三、酒・煙草を要せず。ウドン・センベイ・イワシのスポシ・ミソシルを嗜好す。

四、盛夏といえども腹巻を離さず、極寒にもシャツを用いずして、ジユバン・モモヒキを用い、薄着をなす。

五、夜の宴會を好まず。いかなる場合にも午後十時を過ぎさず。汽車旅行を好めども一切夜行列車を利用せず。

六、寢所は二階または高臺を選び、嚴寒の候といえども通風の良き場所を好む。

七、フロは一番プロを使用し、一年數回健康診断を受く。

八、十年來海拔千八百尺の伊勢朝熊山上に約二週間避暑をなす。

昭和の初頃といえは、幸吉が七十歳に踏上げつた年頃である。古來稀なりと稱した七十歳に上げつての日常生活にして、なおこの通りであるから、五十歳・六十歳頃の鍛鍊生活が壯者も及ばぬ激烈なものであつたことは、想像に難くないであらう。上文中に二本杖とあるのは、かれは居常屋外

に出て土木工事を監督するのが好きであつたが、かかる際には、一方の手には杖と、他方の手にはコウモリガサとを携えている。これは絶えず山坂を上り下りし、かつ随分遠方まで出掛けたからであるが、自らこれと呼んで二本杖といつていたのである。

萬事につけて進歩的・積極的であるのが幸吉の性格である。かつて名古屋新聞社長森一兵の提唱にかかる新日本服を見て、結構だといつていたが、昭和十二年頃から自分もこれを着用することに決心し、これまで使っていた和服は、一擧に全部そのソデを切取らせてしまつた。側近者も最初は餘りにトツビではないかと、ためらつたのであつたが、近時社會の進歩に伴い、街頭ほとんど長ソデの人を見ざるに及んで、何れも皆かれの先見に心服した。

自分も長命を熱願しているためであらうが、老人を敬尚することかれの如きは珍らしい。何かの行事に必ず七十歳以上とか八十歳以上とかの老人を招待することは、上文にも毎度現れているが、自己の壽康を祈願している御座の不動尊に近き濱島町の敬老會のためには、色々盡力をなし、毎年一度その八十八歳以上の高齢者に座ブトンを贈呈することにしてゐる。昭和十四年二月二十五日に、この敬老會が同町小學校の講堂で開かれた時、かれは多徳島から自働艇を飛ばして出席した。當日招待された老人は最高九十五歳の柴原えそを始め、八十歳以上の者男二十八人・女三十四人合せて六十二人を計えたが、この中八十八歳以上の高齢者に、かれは座ブトン一枚ずつを贈呈した後

八十二歳のかれはヤオラ起つて先ず

爺さん婆さんに話をするのに入齒は不用じや。

と開口一番、總入齒を無難作に取外すして懐中にねじ込み、そして次の如き長生談を試みた。

長生すれば恥多しなどいうが、やはり人間は長生せんけりやいかん。私が今日世界の人々から眞珠王とか何とか言われ、またこうして皆さんの前でお話ができるのも長生のお陰じや。私が毎年濱島町の八十八歳以上の高齢者に座ブトンを贈つてゐるのは、實は私も八十八歳まで生きる自信があるからである。私が八十八歳になれば、こんどは濱島町から座ブトンを頂戴するかなハツハハ……私が八十八歳まで生きる自信がついたのは朝熊山の虚空藏さんに八十五歳までの命を引受けて頂き、そして御座の不動さんがあとを引受け下さつたからじや。私が濱島の老人達に座ブトンを贈り初めてから何年になるかな、最年長者柴原さんは八枚たまつてゐるはずである。九十歳まで生きれば十枚になるから、ぜひ私から十枚の座ブトンを貰つて頂きたいものである。

皆さんは長生健康法を、どんなにやつて居られるか。これは重大なことだから、子や孫から教わつた新しいことはダメですぜ。皆さん自身が今日までやつてきた方法、それが一番いい。何よりの證據は皆さんがそれで現に長生していることじや。私は御ちそうは食へん。三度の食事は飯一杯と芋一杯、それでいい、この通ビンビンしている。今年八十二歳じやが若いじやろう。孫・

ひと合せて三十六人のおじいちゃんじや。マアこれからも毎年皆さんと顔を合せることにしよう。今までなら、荒しのために濱島へ渡れないということもあつたが、來年は磯部・鶴方から濱島まで立派な道もできることじや。やどり島まで、モウじきに自働車で行けるといふ御時勢じや、長生をせんといかん。一日でも長く生きてお互に世の中のために働かねばならん。それでは身體に氣をつけて……

これを聞いた來會者一同ヤンヤのかつさい暫らくはやまず、これも長生のお陰じやと感激しつつ引續き同町女子青年團員等の厚い待遇を受け、一同晝食を共にして散會したのであつた。

第二次世界大戦が起つて、金を政府に献納または賣上げることが盛に行われるように成つた昭和十四年に、幸吉もまた種々の金製品と共に金製の總入歯を献納し、その代りゴムの總入歯にした。東京齒科醫專の教授堀江銈一博士の手許から、そのゴム歯が到着したのが昭和十五年一月で、幸吉が八十三歳を迎えた新春のことであつた。ところが、この入歯と共に堀江博士が心を込めた一本の軸が、同じ荷物の包装に入れて届けられた。それは名古屋の戯作者伊勢門水が精根を傾けて描いた自畫像に、例の蜀山人の作といひ傳えられている次の三首の狂歌を自賛したものである。

わがいのち終るとならばせひもなし八十八を過ごしてののち。  
めい土より今にも迎え來りなば九十九までは留守とこたえよ。

留守といわばまたもや使來るべしいつそ行かぬと斷つておけ。

これこそ自分の心境に適合したといつて、ゴムの總入歯でカラカラ大笑した。

この年の十二月五日西園寺公望の國葬の儀が日比谷公園で行われた。幸吉は在京中であつたので會葬しようと黒紋付の羽織・ハカマで祭場に行つたのである。ところが、それが新日本服であるため、禮装に合わないとかどで入場を拒否された。仕方なく神妙に立去つたが、元勳に對する吊禮を捧げずに止むことができず、その翌日早くから起きて墓地を訪ねて參拜し、墓前祭もまだ済まぬおくつきの前にひざますいて、心から故公のめい福を祈つた後、語を改めて

まだ日本に用のある御木本をどうか、あなたの年まで生かして下さい。

と生ける人に物言う如くに願つて退去した。そして兩三日を経て鳥羽への歸途、名古屋に下車して勝沼博士を訪ねてこの事を語り

あなたは西園寺公を九十二歳まで生かした體驗に物を言わせて、こんどは私を長生するようにして下さい。

と頼んだら博士は

お弱い西園寺公でさえ、あの高齡まで生きられたのですから、あなたなら、無理をなさらなければ九十五歳までは生きられますよ。

と答えられたので、非常に喜んだ。

無理をしなければという条件の下に、九十五歳までの擔保を得た幸吉は、自分のがわにおいて一層攝生上の責任を痛感した。かくて八十四歳の夏から、さらに始められたものが、朝のラジオ体操と入浴中の湯かき運動とである。前者は、五時に起床するかれは、朝の放送ニュースを聴き了ると直ぐ外に出て、廣場に男女従業員一同を集め、朝のラジオ体操を行うのである。しかし足がわるいから、自分は腰を掛けて上半身の運動をするのである。後者は、入浴すると何よりも先ず、湯の中で左右の手を動かして湯をかき回すこと約十分間に及ぶのである。するとそれは老人にかつ好の運動となるからである。昭和十六年の春京都に行つて知恩院に岩井管長を訪ねた時、管長から

あなたは、いつも御元気で、マルデ健康そのものようにお見受けするが、保健上何か努めて居られることがありますか。

と尋ねられたので、かれは近頃考へついた上述湯かき運動を語つた。すると管長は非常に感心してその要領を傳授し、その日から直ぐ始めた。その速いのに幸吉もまた感心している。

御木本ボールの名が歐米にとどろいていいるため、戦争以前は外國人の幸吉を訪問する者が非常に多かつたことは、前にも一言したところであるが、終戦後わが國に來ている進駐軍の將校連や、媾和成立後の貿易に備えて、わが國の物産狀況を調査するため渡來した米歐諸國の視察員やバイヤー

等も、多徳に幸吉を訪ねて來るものが、以前にも増して次から次へと打續く有様である。老齡既に九十に入つていられるかれは、少しも厭われないばかりか、事情の許す限り喜んでこれを迎え、おおむね食事を共にして、かれが獨特の料理たる眞珠のフライを供して歡談するのを常としていいる。時としては、こうした多數の來客が連日に及ぶこともあるので、周圍の入々は老主人の疲勞を氣遣つて、そうした會見を適當に按配するの骨が折れるのであるが、かれはイツコウかまわず、元氣に任せて快談をほしきままにし、かの偉くの主、健康の持主たる米軍の將校連をも驚歎させていいる。

昭和二十一年五月進駐軍の司令官アイゲルバーガー將軍以下十數名が來た時のことである。一行は八十九歳の老場主のカクシヤクたる姿に深く感服し、中にはどうか記念の寫眞を頂きたいと懇請する人もあつたので、かれは

こんな老爺のかしこまつた姿では興も薄かろう。私も貴君らの如き壯年時代には、餘技として手品や足藝のマネが得意であつたのだが、今日は一つその名残りでも御覽に入れましょうか。と言うなり上着を脱ぎ去つて、ジユバン・モモヒキの輕装となり、兩手兩足の指間にサツと開いた白扇を一本ずつ握つて、日本舞踊の型を示して即座にこれを撮影させ、そしてこれを贈ることにしたのであるが、その舉止進退の活潑敏捷なものには、一同思わす感歎の聲を揚げたのである。その寫眞は聯合軍總司令部で發刊していいる日刊新聞スターズ・アンド・ストライプスにも載せられていいる。

同じ年の七月幸吉が、居宅前のさん橋から小舟に乗つて對岸の大崎に渡ろうとした時、若き場員達が泳いでいるのを見た。元氣なかれは、わしも一つ泳ごうとヤオラ着衣を脱ぎ捨てザンプとばかり海中に飛び込み、抜き手を切つて數十間を泳ぎ、易々と對岸に上つたのには、居合わせた人々も皆舌を巻いて、その氣力に驚くばかりであつた。この年の九月に來たフアーマン將軍の一行中には、この養殖場のさん橋から飛込んで泳ぎ回る元氣な連中があつた。これを見ていたかれは、お付き合いしようかと、またもや直ぐ衣服を脱して同じく海中に飛び込み、かれ一流の抜き手を切つて暫時泳ぎ巡つたのには、かれらも驚きかつ喜んだ。

人並勝れた健康の持主たるかれも、寄る年波のせい最近に至つて、時として脚部に多少水氣の現れることがある。側近の者が心配して勝沼博士に訴えたので、博士は、そうした場合に内服すべき薬劑を調査して渡された。服薬のきらいな幸吉はこれを用いることを喜ばないが、醫師の指令に背くわけにも行かず、いつもその分量の半分を服用していうには、餘人には一服が適量であろうが私の如く性來丈夫なものには半服でも利くはずじやと。しかもその言の如く、半服ずつの薬用で大抵水氣がひいてしまうのも不思議であると、左右の者が驚いている。

九十歳の春を迎えてからは、脚部の水氣も治つてしまい、醫師が最も懸念していた心臓部多少の故障もほとんど現れなくなつてしまつたので、相變らず元氣で來客を引見している。昭和二十二年

六月二十七日アルモント將軍の一行が來訪した時も例の如く歓迎し、食事を共にして快談したが、一行の中に、かれの年齢を尋ねる者があるから九十歳だと答えたところ、どうしても信じない、もつと若いのだらうという。これを聞いた幸吉は、直ぐ指を口中に入れて總入齒を外すしてしまつて笑つた。さすがの幸吉も上下共の入齒を外すと、全くの老顔となつたので、かの將校の疑團は氷解して、忽ち歡笑となつてうなずいた。これを看取つた幸吉は、手早く總入齒を再び口中に納れるや否や、スツクと立上がつて、その得意の餘技たる日本舞踊の一さしを躍つて見せた。不思議な面持でかれを見守つていた將校連一同も大いに喜んで、或は拍手し或は歡聲を上げ、中には口笛を吹いて躍り出す者もあつて、和氣アイアイ、一座は忽ち談笑のルツボと化した。

しかし、こうした勇ましいこと許りではない。眞珠の事などについて尋ねられる時には、いつも丁寧親切に説示して來訪者を十分に満足させている。イリノイ州立大學化學科長ロジャース・アダムス博士外米國化學者一行が來た時や、アリゾナ州上院議員マックス・フアーレンが來た時の如き皆然りである。そして心身共に相變らずの元氣であつて、昭和二十二年八月六日にマツカーサー元帥夫人が來訪した時の如きも、さん橋まで出て來てこれを迎へ、かつ自ら全場内を案内して歩いたのである。

しかも英雄閑日月ありで、こうした派手な歡送迎の間にあつても、時にはまた童心のこぼれるよ

うな會見をもする。同じ八月の十八日に、一人の小學校児童を連れて母らしき中年婦人が養殖場の事務所を訪れた。來意をきくと、學校で幸吉の事を學び、今でも生きているそんなエライ發明家をば、どうか一度見たいものだと言つてきかないので、静岡縣掛川町から、はるばる連れて参りました。誠にすみませんがホンの一目會つてやつて頂きたいという。それけ殊勝なことだと言つて、幸吉は喜んで面會して親しく款語し、君も將來世の中のためになる事をする立派な人になつて下さいと勵ましたので、母子は手を合さんばかりに喜んで歸つて行つた。さきに尊徳翁生誕地回復の舉に足柄二郡の小學校児童を誘つたことなどを思い合せて、われらは大きな子弟愛・後進愛の表れをかれに見出す。

本年本月本日即ち昭和二十三年一月二十五日を以て幸吉は滿九十歳の誕辰を迎えた。思えば、小さなウドン屋から身を起して、五十六で日本の眞珠王と呼ばれ、七十八に至つて世界の眞珠王とうたわれ、九十を越した今日、稀有の壽康を保つて、しかも非凡の攝生を守り、ハツラツ壯者としての元氣を以て、現にその發明した養殖眞珠の増殖改善にいそんでいるかれの活躍には、今後なおかつ目して待つべきものがある。今や媾和條約もまさに結ばれようとし、わが國の海外貿易が再び始まつた際、日本特有の貿易品の花形として輝かしく登場した養殖眞珠の、生みの親たる御木本幸吉の壽康を祈りつつ筆をおく。(完)

11293

御木本幸吉



昭和二十三年三月十日印刷  
昭和二十三年三月十五日發行

定價金八拾五圓

著者 乙竹岩造

發行者 山本慶治  
東京西千代田區神田錦町三丁目十九番地

印刷者 新井長治郎  
東京都中央區月島通二丁目九番地

發行所

東京西千代田區  
神田錦町三丁目

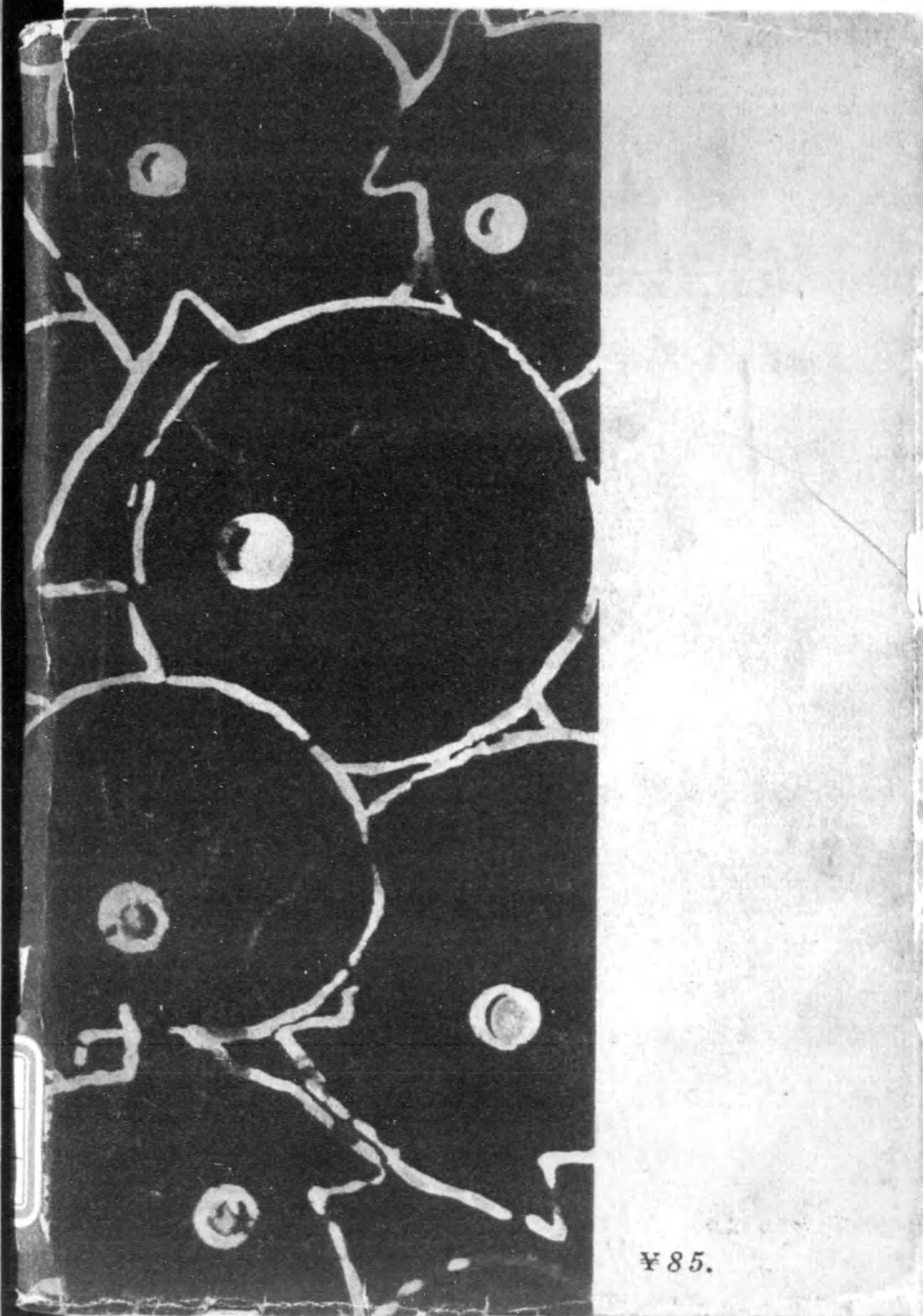
培風館

日本出版協會會員番號A二〇二〇〇一





終



¥85.